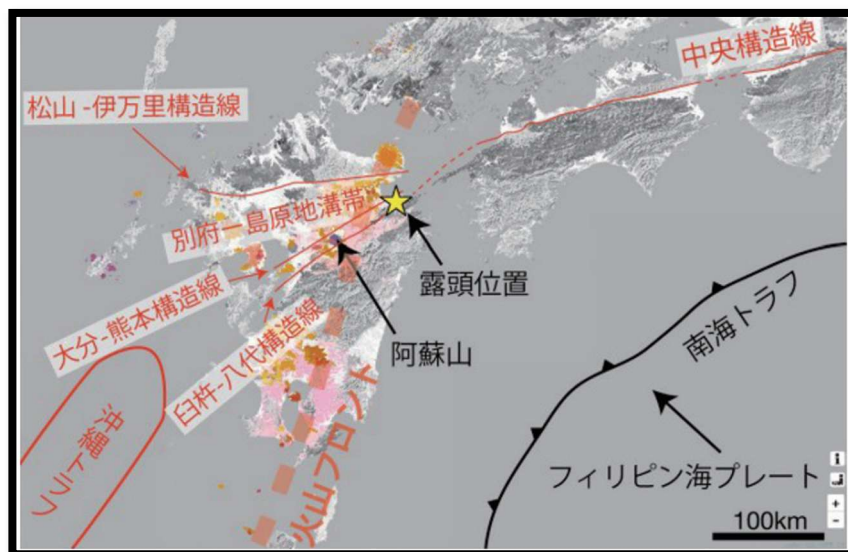


島原半島形成のメカニズム（火山噴火による形成）

1 九州地方及び周辺に存在する地殻プレート、トラフ、地溝帯 及び 構造線



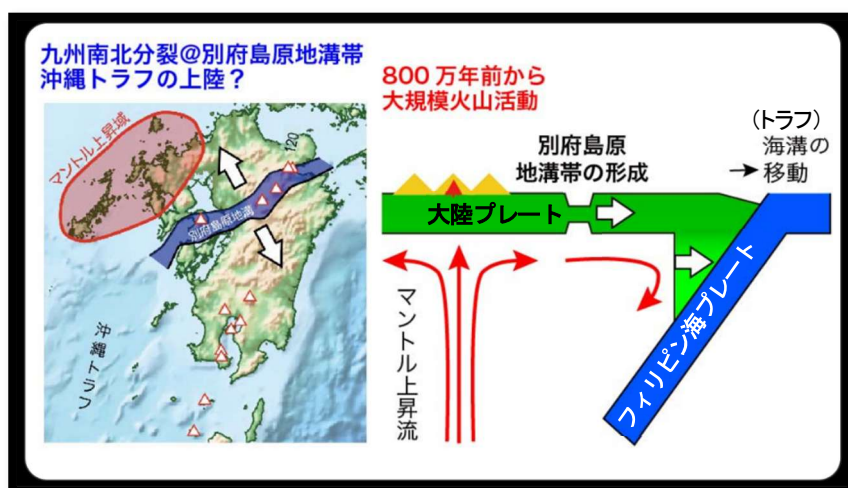
トラフ：異なる地殻プレートが衝突しているライン

地溝帯：トラフ発生に伴い上側に位置するプレートに形成される溝

構造線：地溝帯両側の大規模な断層

島原半島は「別府-島原地溝帯」に存在し、約 50 万年前から活動を開始した雲仙岳の火山活動により円錐状の半島を形成するようになった。

2 地溝帯形成のメカニズムと九州分断の地殻活動



北西に移動するフィリピン海プレートが、大陸プレートに衝突し、大陸プレートの下に潜り込み「南海トラフ」が形成されました。

南海トラフ付近では大陸プレートが下方に引きずり込まれ、大陸プレートのトラフに近い部分が引きちぎられるメカニズムとなります。

やがて、引きちぎられ様とする大陸プレート部分が薄くなり、地溝帯「別府-島原地溝帯」を形成しました。

九州は、別府-島原地溝帯を境界として北九州は北西方向に、南九州は南東方向に引き裂かれるような力を受けています。

地溝帯には滞留するマントルが溜まり易い部分が形成され、マグマ溜まりとなり火山活動のエネルギー源として、活発な火山活動を誘発することになります。

このような地殻変化が約 50 万年前から顕著となり、10 万年の歳月をかけて、約 40 万年前に現在の島原半島が概ね形成されたと考えられています。

3 雲仙岳噴火活動の歴史

① 古雲仙期前期活動: 430～50 万年前

地溝帯の雲仙岳系火山として、島原半島南端付近で火山活動が開始（この時代には島原半島は、未だ形成されていない。）

② 古雲仙期後期活動: 50～10 万年前

地溝帯の複数個所で火山活動が活発化し、島原半島の概略の地形が形成（この時代に千々和の橘湾は、千々和地下の巨大マグマ溜りのカルデラ噴火に連動する地殻の陥没により形成されたと思われます。）

③ 新雲仙期活動: 10 万年前～現在

現在の雲仙岳を中心とした火山活動により、現在の島原半島が形成されました。

代表的な地形は、時代順に挙げれば、普賢岳・眉山(1792 年、日本最大の山体崩壊災害)、雲仙地獄、平成新山、龍石海岸などです。



【千々石・橘湾】



【普賢岳・眉山】



【龍石海岸】



【平成新山】

